

おフランスざんす III

——『フランス人は10着しか服を持たない』 のヒットから見えてくるもの——

堀内ゆかり

フランス語教員としてフランス関連のものは自然と目に留まるのだが、2014年秋に出版された『フランス人は10着しか服を持たない』¹が2015年に売れつづけ、年末の年間ベストセラー²で又吉直樹の芥川賞受賞作『火花』に次ぐ2位となったときには驚いた。なぜこの本はこれほど広く受け入れられたのだろうか？ 1章ではその理由を考察する。2章では、本書のヒットの根底にあると思われる日本人のフランスへの〈あこがれ〉の変遷を概観し、3章では、そこから見えてくる今どきの学生の国際意識についての筆者の見解を述べたい。

1章 『フランス人は10着しか服を持たない』はどんな本か？

1.1 ヒットの背景

この本では、アメリカ西海岸出身の著者が大学生のときにパリに半年間留学し、ホームステイ先の夫人から学んだことが語られている。

ミントグリーンの表紙カバーにはエッフェル塔、パリの街、留学時の著者をイメージさせる若い女性のイラスト（横縞模様の長袖Tシャツに黄色の帽子と黄色のジーンズ姿）があり、Lessons from Madame Chic という英語版原題が筆記体の白抜きの文字でデザインされ、〈おしゃれな〉装丁である。239ページの本に写真はなく、食べ物や料理道具のイラストが添えられている。

『フランス人は10着しか服を持たない』（以下、『フランス人10着』と略す）というタイトルから、内容はファッションや片づけについてかと思いきや、

1 ジェニファー・L・スコット『フランス人は10着しか服を持たない』2014年10月 大和書房

2 2015年ベストセラー、総合部門、日販調べ。

「パリで学んだ“暮らしの質”を高める秘訣」³は多岐にわたる。目次を見てみよう。「日常が突然、特別なものに見えてくる」という導入、1部「食事とエクササイズ」2部「ワードローブと身だしなみ」3部「シックに暮らす」からなる。間食はせず食事を存分に楽しみ、上質なものを少しだけ持ち大切に使い、日常のなかにささやかな喜びを見つけようといった著者の提案は、とくに目新しいものではない。だとすれば、この本が本国アメリカ以上に⁴日本で多くの読者に支持された要因はどこにあるのだろうか。その理由を考えてみたい。

まず、編集者の案であるという巧妙なタイトルだ。10着に関する本書の記述をまとめると以下のとおりである。

ホームステイ初日、自分の部屋に案内された筆者は素敵な部屋に喜ぶが、クローゼットが小さいことに驚く。しかしこの家庭で生活するうちに気づく。「この家の人たちには、これくらいの小さな収納で十分だったのだ。というのも各自10着くらいのワードローブしか持っていなかったから」⁵この10着とは女性であれば「冬はスカート3~4着、セーター4枚、ブラウス3枚」を指し、「コートなどの上着類、ドレス類、アンダーシャツ」⁶は含まれない。

このことから『10着しか持たない』という書名に誇張あり、とも言えるだろうが、「良いものを少数持って日常的に使おうという考え方は[…]フランスではわりと一般的」⁷だ。逆に、アメリカ人はそんなことに驚くのか、アメリカ人はそれほどたくさんの服を持っているのかという疑問が浮かぶ。アメリカ人の目から見たフランス人の生活様式の描写は、アメリカ西海岸とフランスの文化の違いを明白にするだけでなく、日本の文化についての振り返りを促す。日常生活における米・仏・日の微小な差異によって、日本がどの点で
アメリカナイズ
米国化され、どの点で米国化されていないかに気づくきっかけとなる。

また日本では近年、物があふれている状況の解決策として「収納法」、「整理

3 本書の副題。

4 アメリカでは3~4万部が売れたという。読売新聞 2015年4月20日夕刊。

5 『フランス人10着』、p. 59

6 *ibid.* p. 63

7 中島さおり『「フレンチ・マダムのシック」の利用法』

術」から始まり、物を少なくする「断捨離」⁸「お片付け」⁹、さらには極端に物を減らし最小限の物で生活する「ミニマリスト」¹⁰にいたるまで、大量消費社会を否定するような流れがある。単に物を減らすだけでなく、本書が推奨する吟味した物を大切に作る生活は、テレビの連続ドラマ¹¹のモデルとなった雑誌『暮らしの手帖』¹²の目指す生活とも重なってくる。ていねいな暮らしが求められている日本の時代の空気に合ったという面もあるだろう。

1.2 カタカナ語の氾濫

これまでに挙げたタイトルのよさ、米・仏・日の身近な文化比較への興味、片づけブームの流れに加え、この本が読まれる前提として、日本人の生活の西洋化、多様化が不可欠だ。今の日本で欧米の文化が浸透しているからこそ、この本が出版され得たのである。

本書には全般的にカタカナがやたら多い。著者のパリの滞在先での夕食後の様子を描写する1ページ目の17行だけで30語近くある¹³。これらのカタカナ語を分類すると、1)「パリ、タバコ」等カタカナ表記が一般的で（当て字を使う以外は）漢語に言い換えられない語、2)「リビング（居間）、ダイニングテーブル（食卓）キッチン（台所）」等、漢語の言い換えは可能だが、あえてカタカナが用いられている語、3)「ゴブラン織り、フロマージュ、カマンベールチーズ、バゲット」等カタカナでしか表記できない語となる。1)でカタカナが使われるのは当然だが、2)に分類した語は、リビング（茶の間、居間）のように日常的にはどちらも使われるが、カタカナにしたほうが西洋風の印象を与える語である。3)のゴブラン織りは一般の読者に馴染みのない語でも高級

8 やましたひでこ『新・片づけ術「断捨離」』、マガジンハウス、2009年など。

9 近藤麻理恵『人生がときめく片づけの魔法』、サンマーク出版、2010年など。

10 佐々木典士『ぼくたちにもうモノは必要ない。——断捨離からミニマリストへ——』、ワニブックス、2015年など。

11 NHK「連続テレビ小説」「とと姉ちゃん」2016年度上半期。

12 1948年『美しい暮らしの手帖』として創刊、1953年に『暮らしの手帖』に変更。暮らしの手帖社。

13 「リビング、アームチェア、刻みタバコ、パリ、ゴブラン織りのカーテン、ヴィンテージのレコードプレーヤー、クラシック音楽、ダイニングテーブル、コーヒー、カップ、パンくず、“フロマージュの王様”カマンベールチーズ、バゲット、ムッシュー・シック、パイプ、オーケストラ、ポートワイン、グラス、マダム・シック、キッチン、シルクのブラウス、Aラインのスカート、エプロン、マダム、テーブル、コーヒーカップ」『フランス人10着』、p.

なカーテンなのだろうと推測できるし、“フロマージュの王様”カマンベールチーズという、訳者の苦労が忍ばれる表記¹⁴から、フロマージュはフランス語でチーズの意味だとわかる。

バゲットという語の日本での初出は1970年であり¹⁵、この棒状のフランスパンがこの40～50年の間に日本で普及してきた過程を見てきた筆者にとって、こうしたカタカタの羅列による描写が全国各地の幅広い読者¹⁶に抵抗なく受け入れられていることは、大げさだが隔世の感がある。

そもそも『フランス人10着』の著者がその生き方に感銘を受けた夫人は、名を付すため¹⁷マダム・シックと呼ばれている。マダムは英語のミセス同様、既婚女性の名に冠する敬称で、呼びかけとしても用いられるが、日本語では有閑マダム¹⁸という言葉もあるように、お金持ちの上品な奥様という含意もある。この表現に日本の読者がつまづくこともないのだろう。また、服装などに関して「あかぬけていて、粹で、しかも上品で落ち着いているさま」¹⁹を一語であらわす「シック」については、実際に耳にすることは少ないが日本である程度定着していると思われる。シックを体現しているのがマダム・シックであり、本書は「服だけでなく食文化や教養・娯楽まで〈シック〉を浸透させるため」²⁰のレッスンなのである。服装も生き方も保守的なマダム・シックとは対照的な存在として、マダム・ボヘミアンヌ²¹も登場する。夫が貴族の末裔であるとされるマダム・シックは高級住宅街で知られるパリ16区に住み、シングルマザーで自由を好むマダム・ボヘミアンヌは芸術家が多く集まる11区に住む。こうした図式化され単純化された設定は、読者にとってわかりやすいもの

14 『フランス人10着』p.30では「チーズの王様だよ」に「ロワ・ド・フロマージュ」というルビがついている。

15 加賀乙彦『遭難』1970「そのうちバゲットというフランス・パンに見えてくる」日本国語大辞典、小学館

16 インターネットで検索すると全国各地の公立図書館で本書が予約待ちリストに入っていることがわかる。

17 『フランス人10着』p.3「ムッシュ・シック（実名を伏せるため、そう呼ぶことにする）」

18 おそらく今の学生は聞いたことのない語だろう。フランス語由来の日本語で例えば「アベック」は死語に近いが、今の学生も意味は知っている。

19 日本国語大辞典、小学館

20 朝日新聞 2014年12月14日朝刊「売れてる本」

21 ボヘミアンヌは、ボヘミアンの女性形を示すための訳者による造語である。パリジェンヌ、タカラジェンヌからの読者は類推できるだろう。フランス語ではBohemienne（ボエミエンヌ）。

おフランスざんす III—『フランス人は10着しか服を持たない』のヒットから見てくるもの——（堀内ゆかり）

となっている。

1.3 類書とのちがい、学生の反応

本書のようにフランス人の生き方²²を説く書物は日本で多数出版されている。フランス在住の日本の著名人²³が書いた本、日本在住のフランス人が書いた本²⁴、近頃ではブログやマンガなど、〈フランス女性もの〉というジャンルにまとめられるほどである²⁵。

アメリカでも〈フランス女性もの〉の人気は高いようで²⁶、『フランス人10着』以前に²⁷、アメリカ在住のフランス人による本²⁸やアメリカ人女性による本²⁹が出版され、すでに日本で紹介されている。

このように類書が多いなかで、『フランス人10着』の特徴は、著者自身の描き方にあると思う。アメリカ西海岸の女子大生であった自分の姿を、「セレブ大好き消費主義のカルチャーのせいで、薄っぺらな娯楽が巷にあふれる」³⁰アメリカで、「居間でテレビを見ながら絶えずおやつを食べ、ひざに穴のあいたスウェットをバジャマ代わりにしていた」³¹として、ことさら自嘲的に振り返る。そんな娘がパリでシックな暮らしに開眼する様子を、われわれ日本人は他人事として読むことができる。「教養を身につける」「物質主義に踊らされない」³²などとフランス人や日本人が説いたら、読者は押しつけがましいと感じ

22 『フランス人10着』では“アール・ド・ヴィーヴル”（暮らしの芸術）と訳されているが、「暮らし方、生活術」のことで、「芸術」とやや大げさである。

23 雨宮塔子、中村江里子など。

24 ドラ・トーザン『ママより女〜母より妻、妻より女のフランス 女より妻、妻より母の日本』、小学館、2011年。『フランス人は「ママより女」』として小学館文庫、2015年、『フランス人は年をとるほど美しい』、大和書房、2015年など。

25 論末のリスト参照

26 中島さおり

27 『フランス人10着』の文中ではジャン＝ブノワ・ナドーとジュリー・バーローの共著『6000万人のフランス人が間違っているはずがない』（未邦訳）が引用されている。p. 21

28 ミレイユ・ジュリアーノ『フランス人は太らない』、日本経済新聞社、2005年。2013年文庫化。

29 ジェイミー・キャット・キャラン『セクシーに生きる——年を重ねるほどに、フランス女性が輝きを増す秘密』、プレジデント社、2011年。2016年文庫化。

パメラ・ドラッカーマン『フランスの子どもは夜泣きをしない パリ発「子育て」の秘密』、集英社、2014年。

30 『フランス人10着』p. 193

31 朝日新聞 2014年12月14日朝刊「売れてる本」

32 『フランス人10着』3部12章、13章のタイトル

て反発するかもしれない。アメリカ人を介したことで、フランス人が説けば「傲慢」、日本人が説けば「自慢話」「フランスかぶれ」という印象を与えかねないリスクが回避されている。このことが、通常の〈フランス女性もの〉を好む読者層のみならず、広い読者に受け入れられた理由だと思う。また、類書の多くと異なり、フランスの価値観を押し付けていないタイトルも読者層の拡大を促したと思う。

若い世代の反応も知りたいと思い、フランス語圏文化学科1年生のフランス語のクラスで学生にアンケートをとってみた。27名中、『フランス人10着』をテレビ番組³³や授業で話題になり知っているが読んでいない学生が21名。この本を知らなかった学生が3名。フランス語圏文化学科に入学が決まって母親（2名）や塾の先生（1名）に勧められて読んだ学生が3名。そのうち1名は「少し読んだだけ」で、通読した2名の感想は「興味深いけれどパート2³⁴を読もうとは思わなかったくらい」と、「キレイごとが多いなと感じた。でもそれがフランスのマダムたちにとって当たり前のことなのかと思うと、フランス＝キラキラ、セレブというイメージがいっそう強くなった」というものだった。

2章 フランスへの〈あこがれ〉

日本人のフランスへの〈あこがれ〉は世代、性別によって度合いがかなり異なるように思う。2015年は戦後70年にあたる。この70年のあいだに、高度成長期、バブル期を経て日本人の生活は大きく変化した。インターネットやパソコン、携帯電話に始まり、スマートフォンの普及、電子メディア、電子サービスの進化は、ある年代以上の人にとっては昨今の変化に感じられるが、今の若者にとっては物心がついた時からの環境である。

学生を接していると、彼らにはもはや外国への〈あこがれ〉はないのかもしれないと感じることもある。あるいは、あこがれは形を変えて残っているのだろうか？

33 日本テレビ「世界一受けたい授業」、2015年5月23日放映

34 『フランス人は10着しか服を持たない2——今の家でもっとシックに暮らす方法』、大和書房、2016年

まず、日本とフランスとの関係を、日仏修好条約締結から現代まで、国立国会図書館の電子展示「近代日本とフランス」を参照しつつおさらいしよう。

2.1 1858年からほぼ100年

日本とフランスの公式な関係が始まるのは、1858年（安政5年）、ペリー来航から5年後のことである。フランス使節団が来日し、日仏修好通商条約が締結された。同年、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリスとも条約が締結された。いわゆる安政五カ国条約である。

明治維新後の新政府にとっては、旧幕府が結んだ不平等条約の改正が大きな懸案であった。欧米社会のあり方や外交規則など、多くを学びとることが求められ、岩倉使節団の一員として、あるいは留学生・外交官として、多くの人々がヨーロッパに赴き、フランスを訪れた。（「近代日本とフランス——憧れ、出会い、交流」）³⁵

こうして政治・法律、産業の実学の分野から始まった日仏交流は、普仏戦争（1870-1871）におけるフランスの敗北を背景に、日本におけるフランスの影響力は弱まり、文学や芸術の分野にシフトしていく。

明治40（1907）年に渡仏した永井荷風（1879-1959）らに影響され第一次大戦後には多くの小説家や画家、新聞記者らがフランスへと旅立った。当初の憧憬に満ちた彼らの眼差しは、やがてフランスのより深い本質へと注がれ、憧れと現実の乖離を目の当たりにしたとき、その受容と拒絶の間で揺れ動いていく。荷風、藤村から横光利一らへと受け継がれるフランス文化受容の流れは、生きるための極限の生活のなかで、冷めた視線でパリの実像を描き出した金子光晴（1895-1975）の自伝的記録『ねむれ巴里』をもって、ようやく「憧れ」との葛藤から解放されることになる。（傍点筆者、「近代日本

35 国立国会図書館、電子展示会。2014年12月より公開 www.ndl.go.jp/france/

とフランス」]

「多くの小説家や画家、新聞記者ら」といってもごく一部の人们であった。「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し」（「旅上」）フランスを語るときにたびたび引用される萩原朔太郎の1913年の詩からは当時の人々のフランスへの熱い思いが伝わってくる。

1932年から33年にフランス滞在した金子光晴がその時代を記した『ねむれ巴里』が刊行されるのは金子の晩年1973年である。上記引用で「憧れとの葛藤からの解放される」というのは、文学作品の主題としてという意味である。

フランスに渡った「当初の憧憬に満ちた眼差し」から「憧れと現実の乖離を目の当たり」にして「受容と拒絶の間で揺れ動く」というステップは個人の内部で起こることであり、以下に見るとおり、その後も繰り返される。

2.2 1970年代以降の急速な時代の変化

若い世代には想像しにくいことだろうが、観光目的でパスポートを自由に取得できるようになったのは1964年、東京オリンピック開催の年である。つまり、それまでは留学や仕事のためでないと外国に旅行できなかった。1964年の海外渡航者数は約12.7万人であった。その後10年ごとに見てみると、1970年94万人、1980年390万人と急速に増加する³⁶。この数字は全渡航者数であるので渡航先は近隣諸国が多いと推測され、ヨーロッパに渡航した人数はその一部となる。

本稿末の表1、日仏交流年表（「近代日本とフランス」）を参照されたい。1970年には大阪万国博覧会、デザイナー高田賢三のパリ・コレクションデビューと並び、雑誌『an・an Elle Japon』が創刊と記されている。女性誌の刊行がなぜ年表の記載事項となるのか？

今とちがってインターネットがない時代、雑誌が若者の情報源だった。当初フランスの女性ファッション誌ELLE（エル）の日本語版として刊行された

36 「数字が語る旅行業 2016」

『an・an』³⁷は、翌年創刊される『non-no』とともに人気を博し、アンノン族という言葉も生まれ社会現象になるほどだった。「〜ジャボン」という、英語のジャパンではなくフランス語のジャポンを付した女性誌は『マリクレールジャボン』（1982年創刊）『Elle JAPON』（1989年から）、『フィガロジャボン』（1990年創刊）、と続く。これらはファッションだけでなく文学や映画も扱う文化誌でもあり、当時の若い女性のフランスのファッション、文化へのあこがれは、これらの雑誌によるところが大きかったのである。

『an・an』創刊時のアートディレクターであった堀内誠一³⁸はフランスに住み（1974年から1981年）日本の雑誌向けに情報を発信した。フランスを拠点として日本向けに発信するジャーナリスト、写真家³⁹が増えていく。航空運賃も高く、一般の人たちは簡単には海外に行けない時代で海外の新しい情報は貴重なものだった。

前述のとおり1980年に390万人だった海外渡航者数は1990年には1099万人になり1000万の大台を超える⁴⁰。1979年にガイドブック『地球の歩き方』⁴¹が創刊され、1980年代はバックパッカーと呼ばれる若者たちがリュックを背負い、あまり費用はかけずに世界各地を旅した時代だった。

旅行者も増え、パリに住む人も増えた1991年、パリ在住の精神科医、太田博昭による『パリ症候群』⁴²という本が出版され、当時、日本のマスコミでセンセーショナルに取り上げられた。「パリ症候群」とは、前節で見てきた雑誌等がつくったイメージにあこがれてパリに来た日本人が、現実に直面して発症する精神の病である。その後、2004年のリベラシオン紙の記事「ホームシッ

37 マガジンハウス（旧・平凡出版）刊

38 絵本作家でもあった堀内誠一は、フランス初の日本語ミニコミ誌「いりふね・でふね」を創刊（1974年）し、『OVNI』（1979年〜）の前身となる。堀内花子「父、堀内誠一のこと」1、2 小澤昔ばなし研究所「子どもと昔話」67号、68号。

堀内誠一がエディトリアル・デザイナーとして関わった雑誌「ボバイ」（1976年創刊）ではカリフォルニア文化、「ブルータス」（1980年創刊）ではイタリア文化が紹介された。

39 飛幡祐規、稲葉宏爾など。

40 2000年の1781万人をピークにその後はやや減少傾向にある。「数字が語る旅行業2016」

41 ダイヤモンド社『地球の歩き方』シリーズ。「ヨーロッパ編」「アメリカ・カナダ・メキシコ編」からはじまった。
<http://style.nikkei.com/article/DGXZZO69115390Q4A330C1000000?channel=DF130120166125>

42 太田博昭『パリ症候群』、トラベルジャーナル、1991年

クとパリシクの間でゆれる日本人」⁴³でも取り上げられている。

フランスにおける日本文化の広がりについても触れておきたい。1970年にロラン・バルトによる日本文化論『表徴の帝国』がフランスで出版される⁴⁴。1980年代ごろまでフランスで知られている日本文化といえば、映画（黒沢明や小津安二郎）や文学（三島由紀夫、安部公房）が中心で知識人による関心だった。1990年代からフランスで放映された日本のアニメーションを見て育った世代による日本マンガブームが起こる⁴⁵。日本文化を紹介する目的で1981年に「エスパスジャポン」が民間の施設として、公的機関として1997年に日本文化会館が開かれた。2000年に日本のアニメ愛好家が小規模で始めた年1回の「ジャパン・エキスポ」は2015年には24万5千人を集めるイベントとなっている。

高度成長期、バブル期を経て、欧米風の生活が日本に浸透した。1章で見たように、茶の間はリビング、台所はキッチン、洋服箆笥はクローゼットと呼んではうがなじむ住宅環境となっていく。今日ではインターネットの普及により海外の情報も瞬時に知ることができるし、

企業のグローバル化によって衣食住のいずれにおいても、同じ店⁴⁶の同じ品物を手に入れることも可能である。

フランスをはじめとする欧米への〈あこがれ〉は、親や祖父母、先生等から受ける影響に加え、表1の年表のどの時期からリアルタイムで経験してきたかによって大きく異なってくると思われる。

『フランス人は10着しか服を持たない』のヒットの背景について、日本在住のフランス人で家族社会学を専門とするミュリエル・ジョリヴェは「日本人は

43 Audrey LEVI, "Des japonais entre mal du pays et mal de Paris", Liberation 13/12/2004 フランス滞在が3か月を過ぎたころに発症し、「フランス人が自分のフランス語をばかにしている」「フランス人を前にすると自分が滑稽だと感じる」と訴える日本人患者が年間100人以上太田医師のもとを訪れる。日常生活でのいやな経験がいくつか続いたあと軽いうつ状態になり、外出することへの不安、メトロに使うことに恐怖を覚える。パリでの夢を諦められず、日本に帰国することも拒み、症状は悪化し25%は入院となる。目仏若者協会のドラージュ氏によれば「甘やかされ、守られてきた若い女性に多い。西欧型自由への準備不足」が原因という。「日本とフランスでは社会的な関係が大きく異なる。日本式のグループ精神と西洋の個人主義は正反対であり、日本式の目印を失くした日本人はすぐに不安になってしまう」

44 邦訳は『表徴の帝国』、宗左近訳、新潮社、1974年刊

45 大友克洋『AKIRA』など。

46 Gap、マクドナルド、スターバックス、IKEA など。

個を確立したフランス人の生き方に憧れが残っているから売れる」と推測している。例えば、子育てに関して「親は子どもの奴隷ではない」と母親も女としての生き方や楽しみを捨てない、年と共に違う魅力があるから恋愛に年齢制限などない⁴⁷、という考え方だ。本書の読者に30代から40代の女性が多い⁴⁸ことも理解できる。またフランス文学者の野崎歓は、日本とフランスは「根本的に異質だから興味をひかれるのかもしれない」⁴⁹と分析している。そもそもあこがれとは、遠いもの、未知なるもの、異質なものに心ひかれることであり、『フランス人10着』には「美化やステレオタイプもあり、注意も必要」⁵⁰と両氏は指摘しているが、あこがれの対象に対して、日本の一般読者は「美化とステレオタイプ」にいかにして気づくことができるのだろうか。

2.3 学生たちの意識

大学の国際化、グローバル化も進んでいる。学習院大学においても外国人学生も増加しているし、入試制度も多様化し長期の海外滞在経験をもつ学生もいる⁵¹。国際結婚により、ふたつのルーツをもつ学生もいる。学生の関心もグローバル化しており、かつての日本文学科は1991年に日本語日文学系と日本語教育系をもつ日本語日文学科に、またフランス文学科は、「若い世代の関心に、より柔軟に、より充実した形で応えるべく」2007年にフランス語圏文化学科に名称変更した⁵²。2016年には国際社会科学部が開設された。また全体の動きでは、文部科学省によって2014にスーパーグローバル大学37校が選定され、「世界大学ランキングのトップ100に10校以上をランクインさせ、国際的な存在感を高める」ことを目指して「大学の国際化が徹底的に進め」⁵³られている。

2016年度入学で一番若い学生は1998年生まれで、生まれたときからインタ

47 「フランスマダム本 人気 魅力的生き方に憧れ」、東京新聞夕刊、2015年4月20

48 本書の担当者談、東京新聞2015年2月15日朝刊、「スタイル&ファッション」

49 「フランスマダム本 人気 魅力的生き方に憧れ」、東京新聞夕刊、2015年4月20日

50 ibid

51 「外国高等学校出身者・海外帰国生」入試もある。

52 ドイツ文学科はドイツ語圏文化学科に、英米文学科は英語英米文化学科に名称変更している。

53 日本経済新聞、2014年9月26日付朝刊。

ーネットがある世代だ。パリに行ったことはなくても、「パリにはファッションモデルや全身ルイ・ヴィトンでできた女性があちこちにいる」⁵⁴ と思ひ込むこともないだろう。

その一方で、日々の授業で接している平均的な学生の、意識の国際化はそれほど進んでいないのではないかと感じることもある。メディアの影響からか、〈バイリンガル幻想〉や〈ハーフ幻想〉を抱いていることも多い。学生たちは〈バイリンガル〉には、無条件に「かつこいい」「頭がいい」と反応し、英語も日本語もペラペラの人を思い浮かべる⁵⁵ が、完全なバイリンガルは幻想でしかない⁵⁶。また、〈ハーフ〉という言葉自体、失礼な呼称だと思うが、ハーフ＝欧米人とのハーフ、ハーフ＝英語がペラペラという幻想を抱いている。国際結婚等による一方の親が外国人の子供という意味では、親である外国人は欧米人に限らず、どの言語を使うかは成長の過程によってさまざまで、二言語とも高いレベルに達する例は多くはなく、本人の努力なくしてその水準に達しない⁵⁷ という現実にはなかなか目が向かない。

また、学生を含め一般の人が漠然と抱いているパリやフランスについてのイメージには、『フランス人10着』でも強調されていた「おしゃれ」、「高級ブランド」のイメージがあり、実際、日本の女性ファッション誌には高級ブランドの広告写真が多く掲載されているが、ここにひとつの事実がある。フランスの代表的なブランドであるルイ・ヴィトンを有するLVMHグループのフランス国内の売上高は、全世界の売り上げ10%に過ぎず、残りはフランス以外の地域での売上で、「日本国内における売上高は全世界の7%」を占めている。さらに日本人は海外でも買い物をするので、「北米、ヨーロッパ、さらにアジア、ハワイ等の購買力を考慮すると日本市場は極めて重要」⁵⁸ とされる。つま

54 Audrey LEVI, "Des japonais entre mal du pays et mal de Paris", Libération 紙 2004 年 12 月 13 日

55 「バイリンガル」と言えば、多くの日本人は日本語と外国語、なかでも英語を日本語と同じように流暢に話す人を思い浮かべるだろう。しかしヨーロッパの諸言語にこのような含意はなく、どの言語であれ、2つの言語を使用する人を指す。西山教行「多言語主義から複言語・複文化主義へ」『マルチ言語宣言』、p. 202

56 堀内ゆかり「おフランスざんすⅡ——フランス滞在から見えてきた、日本人の〈バイリンガル幻想〉——」『言語・文化・社会』11号、学習院大学外国語教育研究センター、2013年

57 中島さおり「フランスにおける継承日本語の実態調査——家庭における継承を中心に——」『言語・文化・社会』12号、学習院大学外国語教育研究センター、2014年

58 LVMH (ルイ・ヴィトン、モエ・エ・ヘネシー) グループは酒類、ファッション、化粧品、時計、貴金属等の60

り、日本人はブランドビジネスのいいお客さんなのである。欧米の高級ブランドはビジネス面から、日本人が西洋にあこがれを持ち続けているほうが好都合であり、メディアがそのあこがれを増殖させている構造がある。

3章 〈あこがれ〉の先へ

3.1 日本人学生の内向き志向

経済協力開発機構（OECD）の統計で日本人の海外留学人数が大幅に減少⁵⁹したことから若者の内向き志向が指摘されているが、日本人留学生減少の要因のひとつとして、一橋大学国際教育センターの太田浩は「日本というコンフォート・ゾーンへの滞留」を挙げ、以下の引用のとおり、現代の若者の心情を分析している。

日本がこれまでに築き上げた成熟した経済は誇るべきものであるが、それは同時に情報とモノであふれ返った社会、極度に便利で居心地の良いすぎる社会となっている。その結果、皮肉なことであるが、若者はそのコンフォート・ゾーンから飛び出し、敢えて海外の異なった環境の下、多種多様な習慣や文化をもつ人々にもまれ、渡り合いながら、自分の力で状況を切り開いていくような苦勞をすることに価値を見出せなくなっている。また、インターネットの普及によって、未知の世界との関わり方も変わってきた。仮想現実での安易な疑似体験が可能となり、実際に外国に行って自らの目で体験することの意義が曖昧になっているように思われる。さらに、日本の高度に発達した翻訳システムにより、海外の小説や映画がすぐに翻訳版・字幕版で普及するようになったこと、外国への修学旅行や家族旅行が増加したことなどか

以上のブランドを有するバリエーションを本拠とする企業体であるが、「その売上の90%をフランス以外から獲得」している。2014年度の売上は、「フランス10%、フランスを除くヨーロッパ19%、アメリカ合衆国24%、日本7%、日本を除くアジア29%、その他11%」となっている。LVMHグループの概略と活動、グループ成長戦略 www.lvmh.co.jp/group/grow.html

59 経済協力開発機構（OECD）の統計によれば全世界では過去30年で4倍に増加したのに対し、日本人の海外留学人数は2004年に8.3万人をピークに2011年は5.7万人になり、31%も減少した。この統計は学位取得目的の留学生数であり、1カ月未満の短期留学を含めた調査では増加傾向にある。文部科学省集計「日本人の海外留学状況」2016年3月 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afiedfile/2016/11/11/1345878_1.pdf

ら、海外がより身近になった分、かえって外の世界への憧れや興味が薄れてきている⁶⁰。

こうした認識は、われわれ大学教員に共通のものだろう。現状を憂えて太田はこう続ける。

グローバル化によって、外国での出来事が日々の暮らしを直撃し、経済、社会、文化を含めあらゆることが諸外国との相互依存関係のうえに成り立っているにもかかわらず、身近な環境や人間関係など手の届く範囲での幸せに満足し、ぬるま湯的な感覚のまま自己完結できるような錯覚に陥っているのではないだろうか⁶¹。

ここで言われる若い世代の「ぬるま湯的な感覚」には筆者も思い当たる。たとえばフランスの移民問題や人種差別について学生たちは学んでいても、それは単に知識としてであって他人事で、日本における移民や差別の問題には意識が向かないのである。

3.2 あなたは政治難民ですか？

外に出てはじめて、なかのことがわかる、日本を離れて日本のことがわかるようになる、とよく言われる。その一例として筆者のエピソードをひとつ。

これは筆者がベルギーに留学した当初、履修登録に行った大学の窓口で最初に言われた言葉だった。すぐには意味が理解できず啞然としたが、以下の状況だった——

1989年秋のことで天安門事件があった年だった。同年6月に民主化を求めて天安門広場に集まった学生を中心とした一般市民のデモ隊を中国人民解放軍が

60 太田浩「日本人学生の内向き志向に関する一考察」、ウェブマガジン『留学交流』2014年7月号、Vol.40、独立行政法人日本学生支援機構、p.14 www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_jcsFiles/_/201407otahiroshi.pdf

61 ibid. p. 14

おフランスぞんす III—『フランス人は10着しか服を持たない』のヒットから見えてくるもの——（堀内ゆかり）

弾圧した事件で、学生リーダーのウアルカイシらは7月にパリに亡命していたのだ。「あなたは政治難民ですか」とは、私が中国人かもしれないと思つての言葉だったのである。その後、大学の構内で、中国からの政治亡命者は全面的に受け入れるので申し出るように、という張り紙を見てようやく状況を理解した。

この出来事によって、われわれ日本人は、自分の国を出れば日本人であるよりも前にアジア人であることを体感し、フランスをはじめとするヨーロッパに向かっていた私の関心はアジアに向けても開かれ、ベルギー滞在中はベトナム人学生のグループと交流をもつことにもなった。

ここであえて個人的な体験を述べたのは、自分の国を離れて外に出ることによって、思いも寄らない、自分自身が内側から変わるような出来事が誰にでも起こることを示したかったからだ。自分が多数派集団に属しているかぎり、その内部を客観視することはむずかしい。

若い世代には「自らが望んだ、いわば幸福感にあふれる異文化との出会い」を越えた経験をしてほしいと思う。「異文化間性との邂逅はつねに幸福に満ちあふれたものではない。喜びどころか、葛藤や軋轢をもたらす出会いもある。だが、むしろそれらの相克の中にこそ私たちの成長はあり、圧倒的に異なる他者との出会いがある⁶²⁾」

海外研修や留学の機会は学習院大学でも各種用意されており⁶³⁾、それを希望する学生には積極的に勧めているが、必ずしも外国に行かなくても異文化間能力は養えるのではないかと思う。手前味噌のようだが、その一歩は外国語を学ぶことから始まる——

人は、自分の言語の内部に閉ざされないために異言語を学ぶ。**1つの言語にとどまると、ただ1つの文化、ただ1つの伝統に閉じ込められてしまう。**

アングロサクソンの人々の問題点は、誰もが自分たちの言語を話し、英語を

62 西山教行「異文化間教育はどのように生まれたか」『異文化間教育とは何か』、p.71

63 2014年に学習院大学国際研究教育機構が開設された。

理解するという理由から、英語だけで満足してしまうことにある。自分たちの言語の成功によって、小さなところに閉じ込められているのだ。(エマニュエル・トッド、経済人類学者)⁶⁴

3.3 フランスかぶれ

フランス滞在記⁶⁵を書いたとき、「フランスでは～～」とあれこれ書き連ねる気恥ずかしさから、「おフランスざんす」というタイトルを思いついた。本稿で日本人のフランスへのあこがれの変遷をたどる過程では、イヤミという「フランスかぶれ」の人物に「おフランスざんす」と言わせる赤塚不二夫の慧眼を再認識した。

赤塚不二夫がイヤミを作ったのは、海外旅行自由化直前、人々の外国へのあこがれが強い時期だ⁶⁶。当時外国に行った人は、外国の豊かさに感化されて帰国して自慢話となってしまうのも当然だし、その話を聞く側には羨望もあっただろう。イヤミの「おフランスざんす」の一言によって、少しフランスに行っただけで「フランスでは～」と偉そうに語る人たちの滑稽さが浮かび上がる。

ここで強調しておきたいのは、赤塚自身は手塚治虫の「マンガ家になりたかったら一流の音楽を聞け。一流の映画を見なさい」というアドバイスどおりにクラシック音楽を聞いたり、映画を見て、欧米をはじめとしてあらゆる文化を学び吸収しようとしていたことだ⁶⁷。それだからこそ当時すでに、状況を客観

64 大木充・西山教行編『マルチ言語宣言——なぜ英語以外の外国語を学ぶのか——』p.239 京都大学学術出版会、2011年

65 堀内ゆかり「おフランスざんす！——フランス滞在で見えてきた「コミュニケーション」の授業をめぐって——」『言語・文化・社会』4号、学習院大学外国語教育研究センター、2006年

66 赤塚 おそ松くんを描きはじめた頃（昭和37年〔1962年〕）、外国旅行に行ける人なんていなかったの。でさ、あなたたちみたいなブレスの人のなかには取材で外国へ行ける人がたまにいたわけ。行き先はヨーロッパが多かったようだね。それでさ、奴らが日本に帰ってくると何かと「フランスでは」っていいだすんだ。ひとことめには、フランス。

——けっこうイヤミですね。

赤塚 そ。だから、イヤミを作ったの。つまり、イヤミには特定のモデルなんてないってこと。敢えていえば、そういうイヤミな連中全体がモデルだったのか。たださ、イヤミの口癖の“〇〇ざんす”はトニー谷からいただいたんだよ。

田塾哲文『ひみつのアッコちゃんのコンパクトはなぜ・・・ボクが解決したサブカルチャー疑問集——』p.5、徳間書店、1993年

67 「必死でクラシック音楽を聞いて、映画をかたっぱしから見た。今から思えば、そういうことが栄養になったんだよ」p.5-6

視し「フランスかぶれ」の愚かさを笑いに転換できたのだろう。

イヤミが登場するマンガ『おそ松くん』の6つ子の主人公は2015年、大人になって『おそ松さん』としてテレビアニメとして戻ってきた。うれしいことに「フランスかぶれ」キャラのイヤミも健在である。

「フランスかぶれ」という点では、『フランス人は10着しか服を持たない』も、そう感じさせないようにしている著者の配慮は感じられるものの（だからこそヒットした）、フランスかぶれによる、フランスかぶれのための本だ。この本に今の学生がさほど関心を示さないのは当然ではある。学生たちにはその先へ進んでほしいと思うし、そのためにはメディアリテラシーやクリティカルシンキング、異文化間教育が必要となってくるだろう。

結びにかえて

『フランス人は10着しか服を持たない』が日本でヒットした2015年、パリは二度の惨事に見舞われた。3月のシャリー・エブド事件、11月の同時多発テロである。テレビではテロ直後、現場付近の映像が長々と流れた。テロ後、パリを訪れる観光客は全般的に減少したが、とくに日本人観光客が半分近くに減ったという⁶⁸。あこがれの花の都・パリから一転、リスクの高い都市となってしまったのか。イメージ先行という点で、『フランス人10着』と観光客減少は表裏一体の関係にあるように思う。

「オレ、映画マニアだから。奈良から東京へでてきて下町の工場に勤めてた頃（昭和28年頃）なんて、年に200本近く見てたよ。そのせいでいつも、オレ、キャベツばかり食ってたもん。」ibid. p. 3-4

68 「パリの観光客が激減 日本人観光客は46%減」16年前半、パリを訪れた日本人観光客は46.2%減、ロシア人は同35%減、イタリア人は同27.7%、中国人は同19.6%減、アメリカ人は同5.7%減、WWDJapan 2016年8月29日 www.wwdjapan.com/322664

表1 日仏交流年表

西暦	元号	日本
1960		ゴダール『勝手にしやがれ』日本公開
1963		アラン・ドロン来日
1964		海外旅行自由化*
		東京オリンピック
1966		サルトル、ボーヴォワール来日
1968		
1969		
1970		大阪万国博覧会 『an・an ELLE JAPON』創刊 高田賢三、パリ・コレクション・デビュー
1972		ポール・ボキューズ来日 沖縄本土復帰 池田理代子『ベルサイユのばら』連載開始
1973		金子光晴『ねむれ巴里』刊行
1974		宝塚歌劇団《ベルサイユのばら》初演
1975	昭和 50	加藤周一『日本文学史序説』刊行
1978		
1979		
1980		
1981		
1986		
1987	昭和 62	富岡製糸場の操業停止
1989	平成元	
1990	平成 2	
1991		
1992		
1994		シャネルが銀座に出店
1995		フランス核実験に対して日本で批判高まる。
1996		日仏対話フォーラム設置
1997		
1998		
1999		日産自動車ガルーノ傘下に
2000	平成 12	
2001		
2003		『ミシュランガイド東京』発売 「和食」無形文化遺産に登録
2005		
2008		日仏交流 150 周年
2011		
2014		富岡製糸場、世界文化遺産に登録

おフランスざんす III—『フランス人は10着しか服を持たない』のヒットから見えてくるもの—（堀内ゆかり）

西暦	元号	フランス	世界の動き
1960			
1963			
1964			
1966			
1968			ブラハの春、パリ 5 月革命
1969			アポロ 11 号月面着陸
1970		ロラン・バルト『表徴の帝国』原書発売	
1972			
1973			
1974			
1975	昭和 50		ベトナム戦争終結・ランブイエ・サミット・パソコンの登場＊
1978			日中平和友好条約
1979		OVNI 創刊＊	ソ連がアフガニスタン侵攻
1980			イラン・イラク戦争
1981		Espace Japon 運用開始＊	
1986		大相撲パリ公演	
1987	昭和 62		
1989	平成元		天安門事件・東欧民主化。ベルリンの壁崩壊・最初の電子メール＊
1990	平成 2	大友克洋の漫画『AKIRA』がフランスでヒット	
1991			湾岸戦争・ソ連解体・www（ワールドワイドウェブ）の公開＊
1992			マーストリヒト条約
1994			
1995			
1996			
1997		パリ日本文化会館開館	
1998			グーグル検索エンジン誕生
1999			
2000	平成 12	Japan Expo 開始	
2001			米国同時多発テロ・米国がアフガニスタン攻撃
2003			
2005			YouTube がサービス開始
2008			
2011			福島原発事故
2014			

「近代日本とフランス」日仏交流年表より抜粋。＊の項目は筆者が追加した。

学生に勧めたい、フランス生活を知るための気軽に読めるマンガ・本リスト

〈マンガ〉

藤田里奈『フランスはとにつき』2016年、イースト・プレス

さしたる目的もなくワーキングホリデーでパリに住むことになった漫画家の目から見た日々。初心者向き。

かわかみじゅんこ『パリパリ伝説——不思議いっぱいパリ暮らし!』1巻、フィールコミックス、2004年、祥伝社

フランス人の恋人を追ってパリへ行く1巻から、子育て中の2016年刊の9巻まで、淡々と描かれるフランスの生活の着眼点が鋭い。

じゃんぼ〜西『パリ、愛してるぜ〜』、2011年、『かかってこいパリ』2012年、『パリが呼んでいる』2012年、飛鳥新社。『モンプチ 嫁はフランス人』2015年、『モンプチ 嫁はフランス人2』2016年、フィールコミックス、祥伝社。

〈フランス生活もの〉は女性による作品が多いなかで、男性の視線が新鮮。

番外編：

尾嶋彰『パリふんじゃった』、文藝春秋、1995年

フランス在住25年の建築家が仕事で出会った奇人たちを語るエッセイ。20年以上も前に出た本だが、その面白さは不減。

(附記)

本研究は、学習院大学外国語教育研究センター2015年度研究プロジェクト「〈パリに住む〉イメージの研究」による研究成果の一部である。

O-France zansu ! III

HORIUCHI Yukari

Un livre dont le titre japonais vous paraîtra sans doute bizarre 『フランス人は10着しか服を持たない』 (*Les Français n'ont que dix pièces de vêtements*) a eu un grand succès au Japon. Ce livre dans lequel l'auteur américaine Jennifer L.Scott raconte son expérience vécue dans une famille parisienne (le titre original est *Lessons from Madame Chic*) s'est placé au deuxième rang des livres les plus vendus au Japon en 2015.

Une des raisons de la réussite de ce livre s'explique par l'adoration que, depuis l'ère de Meiji, les Japonais ont éprouvé pour la France au cours de leur processus d'occidentalisation. Cet amour fervent pour la France s'est étendu au grand public dans les années 70. J'ai analysé dans cet article l'influence des revues féminines ou des livres écrits par des Japonaises ayant vécu en France.

Aujourd'hui, avec la mondialisation, les jeunes Japonais (mes étudiants qui apprennent le français, par exemple), me semble-t-il, n'ont plus cette adoration apparente pour l'Europe.

La France conserve le prestige de ses grandes marques de luxe, aux publicités attirantes par la grâce d'actrices célèbres, mais certains préjugés font du tort à son image. Les Français sont jugés impolis vis-à-vis des touristes et les événements récents ont entraîné une partie des Japonais à considérer que le pays pouvait être dangereux. Il importe de développer l'information. Tout voyage se prépare : la connaissance des autres civilisations est un utile moyen de vaincre les idées toutes faites et de mieux profiter de son séjour à l'étranger.